

日付:2014年9月28日／聖書:創世記49:28～33

主題:「寄留の民」

ヤコブは、晩年を迎えた。ヤコブは息子たちに命ずる。「間もなくわたしは、先祖の列に加えられる」と。これは族長物語の特徴の一つといえる。旧約聖書には死後、「天国に行ける・行けない」というような言葉は出てこない。そもそも天国、神の国という言葉自体がまず出てこない。この「先祖の列に加えられる」という言葉の中に、死後は、誰でも一人ではない、先祖の列に加えられる、一人一人は覚えられて行く。生きた神の下で、死後もなお、覚えられ、生かされて行く。決して一人ではないというメッセージがあり、全ては神の御許に行くという慰めがある。

この族長物語のもう一つの特長かと思うが、一貫して彼らは「寄留の民」としての立場を明確にし、生きる姿勢を貫いている。アブラハムがカナン地方に入った時、主なる神が「この土地を与える」と語られたが、決して権力、武力、神の不思議な力をもって、土地を奪うといことはしない。自らを寄留者として、常に謙虚に先住民の方々と丁寧に接触して信頼されて行く中で、必要な分だけ、土地を買い取っている。ここに一つの平和の基がある。

この「寄留の民」とは、「よそ者」、「間借りする」という立場、「少数者」、「マイノリティー」に生きる人々ということになる。私たちも、そういう立場の経験はないか？ 障害を持っている、病気を抱えている、仕事がない、心から話せる友がいない・・・など。聖書の言葉は、そういう普遍的な広がりをもって、私たちに神の言葉として慰めを下さるもの。神は「わたしはあなたと共にいる」という言葉を語ってくださっているのである。

この「寄留の民」とは、この沖縄にも当てはめることが出来るだろう。日本国の中で、常に小さくさせられ続けている沖縄。されど、アブラハムやイサク、またヤコブがそうであったように、神が共に居てくださるということから、人間としての気概を忘れずに、誇りをもって生きた。沖縄もまた、決して屈せず、失望せず、あきらめず、沖縄らしく歩むことを願う。神が共におられる寄留の民として。(神谷)